Network 9

東京教区教化委員会報　ネットワークナイン

2022年2月号 No.379

Network 9

東京教区教化委員会報　ネットワークナイン

2022年2月号 No.379

表紙　仏花

石川 真樹 ［茨城１組 福法寺］

花材　高野槙、菊、小菊、
カーネーション、アイリス

Shinran 850th

―〈２０２３年　宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年　慶讃テーマ〉―

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

東京教区教化委員会報　ネットワークナイン

発行日　2022年2月1日

編　集　教化委員会広報・出版部門

『ネットワークナイン』班　編集員

総編集長：本田　彰一（東京1）

チーフ：中村　晃（茨城1）

佐々木誠信（東京4）朝倉　俊隆（東京5）五島　大地（東京8）小田　俊彦（茨城1）大山　信敬（茨城2）佐々木 萌（長野5）

チーフ：田上　翼（茨城1）

坂東　性悦（東京2）平松　正宣（東京3）櫻田　純（東京6）秦　顕生（湘 南）和田　祐樹（三 浦）

チーフ：田宮　真人（東京8）

土岐　孝広（東京1）内藤　友樹（東京1）渡邊　尚康（東京3）相馬　法道（茨城1）鞠川　卓史（湘 南）

発　行　真宗大谷派東京教区教化委員会

〒177-0032　練馬区谷原1-3-7東本願寺真宗会館

TEL. 03-5393-0810　FAX. 03-5393-0814　Email. nw9@ji-n.net

ご意見、ご感想は上記連絡先までお願いします。

Network9
東京教区教化委員会報　ネットワークナイン
2022年2月号 No.379

もくじ

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業
●03 ５０年前の 宗祖親鸞聖人御誕生八百年 立教開宗七百五十年 堀 秀之

特集
●07 東京真宗同朋の会会長に聞く 野田 路子

●16 法語ポスター

教区教化通信　総合調整総務会
●17 伝道講習会　２２期修了者の集い 中村 晃

教区教化通信　同朋の会推進部門
●18 真宗門徒 秋のつどい —推進員のつどい— 光林 智暁

教区教化通信　青少幼年部門
●19 第２回 青年学習会 フィールドワーク 本多 敬有

教区教化通信　「同和」協議会
●20 第２回部落問題基礎講座を 受講して 平林 勝司

教区教化通信　教学館
●21 私の出遇った言葉 伊與田 兼信

教区教化通信　大谷保育協会
●22 子育ての大地 五島 満

はい！こちら真宗会館です
●24 駐在日記 佐々木 弘明

はい！こちら真宗会館です
●25 所員のつぶやき 里雄 亮意

●27 敬弔・涌 和田 祐樹

Shinran 850th

―〈2023年　宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年　慶讃テーマ〉―

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

50年前の宗祖親鸞聖人御誕生八百年
立教開宗七百五十年

東京1組　來應寺　前住職　堀　秀之

はじめに

2023年3・4月に宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要を迎えるにあたり、50年前の御誕生八百年・立教開宗七百五十年の法要の経験を書いてほしいとの依頼があった。現在では、50年前の法要について知っている人も少なくなったようである。その当時は、法要の記録をまとめた文書も少なく、いろいろさがして、当時の法要についてまとめた資料を見返した。

50年前の法要

50年前の親鸞聖人御誕生八百年・立教開宗七百五十年の法要は、1973年(昭和48年)4月に厳修された。テーマは「生まれた意義と生きる喜びを見つけよう」だった。その頃、宗門としては本廟奉仕団も多くあり、特別伝道なども行われ、教区や組においても聞法の場が多くなった頃であった。「タンパチ」という呼び声と共に、宗門全体が法要を迎えるあつい気持でいっぱいだったように思う。

法要は、4月1日から8日、4月13日から16日と2回にわけて勤められた。毎日第一法要、第二法要、第三法要が勤められ、4月7日には縁儀、16日には庭儀が行われた。多くの参拝者が上山し、法要は毎座満堂であったと当時の新聞が伝えている。

若い人達の参加

特に感じたのは、法要だけでなく、青少年の上山をよびかける行事が多く行われたことが記憶に残っている。保育関係、児連、スカウト、仏青、合唱団など若い人々が集まる行事が多く行われた。境内で日本ビューグルバンドの演奏が行われたり、当時人気のあった高石ともやとナターシャセブンのフォークコンサートが開かれ、4千人位の若い人が集うたと新聞に書かれている。

4月1日には、日本ビューグルバンド、富山や岐阜のボーイスカウト、ガールスカウトの鼓隊、大谷高校のブラスバンドと共に、保育、児連、スカウト、仏青の若い人達が、本山の山門前をパレードし、御影堂（当時は大師堂といった）における京都市交響楽団と合

唱連盟による音楽法要に参拝した。そのあと50人ぐらいの若い人が集まり、青少年結集大会が行われたと記憶している。

教区における団体参拝

東京教区においては、この法要に参拝する団参が計画された。3月31日出発から4月6日出発まで8回の団参募集が行われた。どの回も600名ぐらいで、本山の法要に参拝し、そのあと観光をするコースであった。教区内の各組は、それぞれ日を選んで参拝団の計画をたてた。私の属する東京1組では4月6日のコースで約600名の御門徒が法要に参拝した。当時、私は東京1組の副組長をつとめていたので、団参の計画、実施に大変だったことを思い出す。

御誕生八百五十年を迎える

いよいよ2023年3・4月には御誕生八百五十年・立教開宗八百年の法要を迎える。しかし、コロナウイルスのために各寺院では、行事や集まりが行えない昨今である。コロナウイルスのために法要どころではないという人もいる。法要まで2年もない今、法要の計画、準備を進めている時であるが、不安な気持ちである。コロナウイルスの情況がどう変わるかわからないが、それに対応しながら、親鸞聖人御誕生、立教開宗を祝う法要を是非お勤めしたいと思う。

今後の慶讃事業予定

・教区お待ち受け大会

―東京教区500ヵ寺からつながる―
オンラインお待ち受け大会

【期　日】2022年6月13日（月）
13時30分～

【開催方法】ZOOM・YouTubeでのライブ配信

【講　師】池田 勇諦 氏
三重県桑名市 西恩寺 前住職
真宗大谷派学階「講師」
同朋大学名誉教授

※内容につきましては、あらためてご案内いたします。

みんなで付けよう!!

「慶讃バンド」

輪袈裟、畳袈裟、坊守章、肩衣に付けて慶讃法要を盛り上げよう！

宗祖親鸞聖人 御誕生850th 立教開宗800th
真宗大谷派（東本願寺）
南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

東京教区ホームページ「暮らしにじゅーん」

「慶讃バンド」のPDFデータは東京教区ホームページよりダウンロードできます。どうぞご活用ください。

より一層の周知に資するため、慶讃バンドや着用している写真等を、「#慶讃バンド」を付けてSNSへ投稿をお願いいたします。

50 年前（１９７３年）の

宗祖親鸞聖人御誕生八百年・立教開宗七百五十年　慶讃法要

写真提供：本山 慶讃事業本部事務室

合唱大会
（3 月 31 日～4 月 1 日）

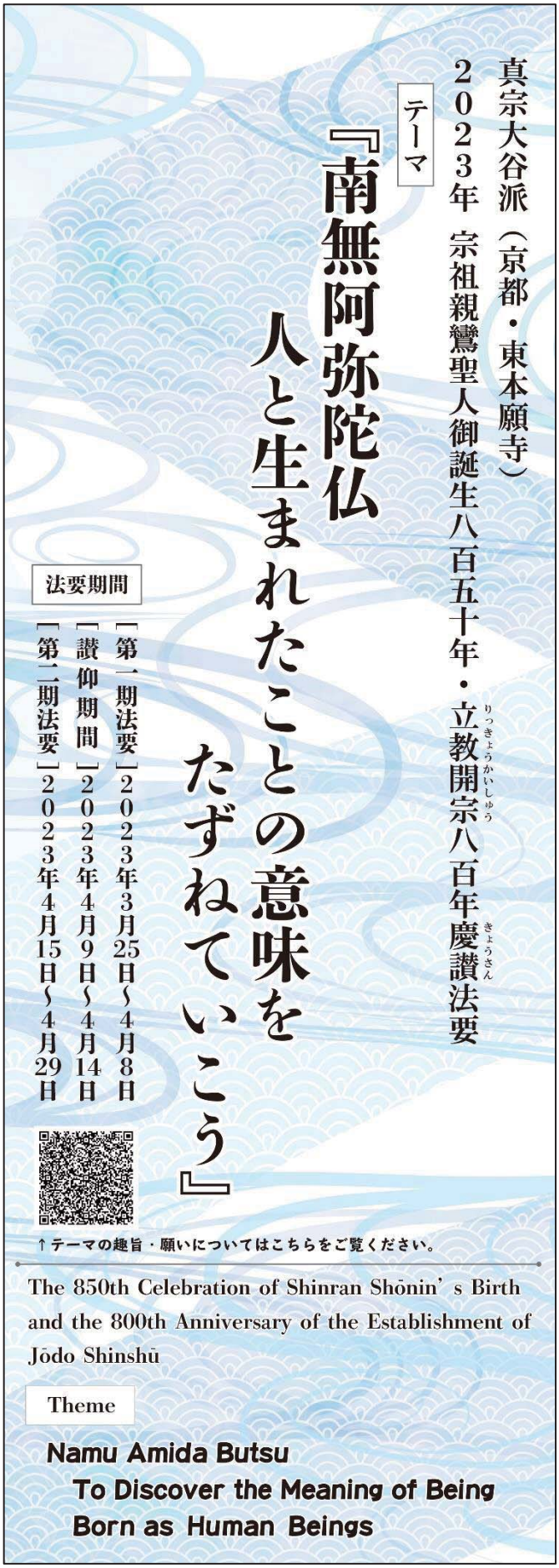
庭儀（4 月 16 日）

若きいのちの集い
高石ともや と ナターシャセブンの
フォークコンサート
（3 月 31 日）

仏青大会
（3 月 30 日～4 月 1 日）

青少年結集大会
パレード（4 月 1 日）

「慶讃法要・慶讃テーマ」のポスターが東京教区ホームページ「暮らしにじぃーん」からダウンロードできます!!



東京教区で作成しました「慶讃法要・慶讃テーマ」のポスターが東京教区ホームページ「暮らしにじぃーん」からダウンロードできます。ダウンロードしていただければ、ご寺院、ご自宅のプリンターでお好みのサイズに印刷できます。縦長サイズですので、掲示板のちょっとしたスペースに掲示いただくなど、ぜひご活用ください。

特集

東京真宗同朋の会 会長に聞く

進学や就職、結婚によって、故郷から離れて暮らしている門徒の方を、「離郷（りきょう）門徒」といいます。特に首都圏には全国各地から人が集まっていることもあり、大勢の「離郷門徒」がいらっしゃいます。また「離郷門徒」の方のみでなく、首都圏に住んでいて、何らかのご縁があり、真宗の教えを学びたいと思っている方も大勢いると思われます。このような方を対象とした聞法会などを「東京真宗同朋の会」が開催しています。

今回の特集では、「東京真宗同朋の会」会長の野田路子（のだみちこ）さんに、会との出遇いや願いについてお話をうかがい、各地で行われている聞法会などの活動をご紹介いたします。

この特集を通じて、「東京真宗同朋の会」の活動に興味をお持ちいただければ幸いです。

（取材・田上班）

野田路子氏インタビュー

「東京真宗同朋の会」会長
野田 路子 氏

離郷門徒として

―真宗会館にはどのようなきっかけで来られるようになったのでしょうか―

野田　私の父は広島出身なんですが、父をはじめみんな東京の学校に来て、東京で就職したので、広島には帰らずそのまま東京近辺に住むようになったんです。ですから、父方の親戚はどこのうちもお墓は広島にありますけれども、あちらには住んでいない。みんな空き家ですね。それで東京にお手次のお寺さんがありませんので、離郷門徒ということになります。

何かあった時には広島のご本家さんまで行ったりするんですが、その時に広島のお寺さんにお参りに行くと、とても喜んでくださいます。父の実家はもう叔父が継いで入っていますから、そこは私たちは縁がないわけですけれども、坊守さんがとても明るくて、訪ねていくと、とても喜んでくださって、何となく縁を切りたくないなっていう気持ちもあるんです。距離的には随分遠いのですが、広島のお寺さんと全く縁を切ってしまうというのは、とても残念だなっていう気持ちがあります。明るくて元気な坊守さんなので、お会いするとウキウキします。私、お話するのが好きなので「東京ではこういう所に行ってるんですよ」みたいに話すんです。住職さんが学校の先生をしていらっしゃいますので、訪ねていくと、たいてい坊守さんが応対してくださるんです。先祖のお墓があるので、そこで坊守さんがお経をあげてくださいます。

父が亡くなった時は、母がまだおりましたので、それほどの孤独感というか、喪失感はなかったのですけれども、母が亡くなった時に、心のよりどころをなくしてしまったというんでしょうか、その時は本当に落ち込みました。母は自分で立って歩くことは出来ませんでしたが、家の中ならば這っての移動は出来たので、12年間ずっと家で看病していました。こんなことをいうのも変ですが、余所の家の親は亡くなるかもしれないけれど、自分の親が亡くなってしまうなんてことは想像もつきませんでした。もう自分の親だけは永遠に生きているものだと思っていましたから。

広島のお寺は遠いということもあって、東京で霊園を求めていて、そちらに納骨しました。母方の実家が浄土宗だったのですが、そちらのお寺さんにはよく行っていて、お寺にあるお墓ならば毎朝お経が聞こえてきますので、両親にもそういうのを聞かせたいと思いまして、どこか東京にいいところがないかと探して、当時はまだ不慣れだったインターネットで調べて、真宗会館を見つけたんです。真宗会館と出会えて本当に良かったです。それからいろいろなことが広がりました。

真宗会館とのであい

野田　最初は恐る恐る、ちょっと怖いかなと

思っていました。「真宗会館」といわれてもよくわかりませんでしょ。ですから恐る恐る来て、2、3回ちょっとお話を聞いてみて、日曜礼拝の受付の方に「また来週もいらしてくださいね」と一言いわれました。その一言に惹かれてこちらに毎週来るようになりました。その時にその方のお名前を聞かなかったのが本当に残念なんですけれど。

真宗会館では、お参りに来られる方ですとか、いろいろな方とお話するんですが、その方たちにも惹かれます。人に惹かれたのが一番かもしれません。

お勤めの時に、最初に「正信偈」を勤めますでしょう。私は、暗い宗教ではなくて「優しくて明るい宗教」というのが希望なんです。ですから、勤行集（赤本）の漢字に全部振り仮名を振ってあるところなどが素敵だと思いました。人生の中でお葬儀とかそういうことは一番悲しいことだと思いますけれども、それでも「明るい宗教」であってほしい。

それから「穢れ」ということについて、こちらの宗派のお葬儀に行きますと、「お塩は要りません」と書いてありますが、私はそれに本当に感動しました。昨日まで一緒にいた人がなんで「穢れ」と言われなければならないのでしょうか。もし自分のことを「穢れ」と言われたらどんな思いがするかと思って、その『穢れ』ではない」という言葉にとても惹かれました。

ですから私が惹かれるところがたくさんあって「ここだ！」と思いました。また、ここに来られている方がみなさんとても優しくしてくださいました。

以前に、ホテルでやった坊守さんの会に行ったことがあるんです。その時に坊守さん方がみなさんすごくはつらつとしていて、「あぁ、私が目指す明るい宗教ってこれだ」と思いました。

東京真宗同朋の会へ入会して

―東京真宗同朋の会（以下、東真同）に参加されるようになった経緯はどのようなものだったのでしょうか―

野田　東真同には自動的に入っていたような感じです（笑）。私はもう仕事も辞めていましたので、週のスケジュールは日曜礼拝から始まるという感じでした。ここへ来るのが楽しみで毎週欠かさず来ていましたからスタッフの方の目に留まったんじゃないでしょうか。それでお誘い頂きました。まず「真宗宗歌」を歌うところから始まって、「正信偈」をお勤めして、ご法話を聞きます。それが出来ることが幸せです。これが親が残してくれた最大の財産だと思います。

家では、毎朝お内仏を開ける時に「おはよう」って言って開けるんです。それで夕方には「じゃあまた明日ね」と言って閉じます。軽い気持ちとかそういうことではなくて、阿弥陀様や親鸞様と「密」でありたいと思っています。

コロナ禍の現在、真宗会館ではオンラインを併用して日曜礼拝を行なっている

お内仏に手を合わせるとか、そういうことは、もともと自分の身に全然違和感のないことなんです。そういうふうに育ててくれた、親や叔父にとても感謝しています。叔父も寺の世話役をやっておりましたし、親族の子どもたちも、そういうことを嫌がるとか怖がるということもなくやってくれるので、それもまたすごく有難いですね。いつもオープンに話しているからいいのかなと思います。

―東真同ではどのような活動をされているのでしょうか―

野田　本山に参拝したり、旅行があったりしますが、そういう活動は積極的に参加しているんです。出歩くことには積極的に参加するんです。そういうふうに心がけています。何もかもわからないことが多いので、まず行ってみるんです。そこから始めていこうと思っています。お寺さんのこととかそういうことは人に聞いてもわからないですし、自分がそこに訪ねて行ってみないとわからないということが多いですから。

真宗会館でお参りされている東真同の方は、皆さん、すごく博識で熱心な方ばかりです。まねしないといけないな、学ばなければいけないなと思います。

「東京真宗同朋の会ホームページ」より
北陸地方への御旧跡巡拝

私の家の近くには、東真同の会場のひとつになっている顯真寺さんがあるんですが、歩いて行ける所にあって本当によかったと思っています。特にコロナ禍の今となっては、歩いて行ける所にあるって、本当にありがたいです。顯真寺さんでは、今は、マスクをして距離をとることを心掛けながら大体いつも同じメンバーで集まっています。その時々でテーマを決めて、『真宗聖典』の中から選んだりしているんですが、最近は『歎異抄』のお話を聞いています。

参加される方の中には、難しいことを話される方もいらっしゃいますので、ぽかんとすることがたくさんあります。だから私、まだ真宗会館に来はじめたばかりの頃、「なんだか難しくて、話が全然分からないんですけれど」って言ったんです。すると、「野田さん、分かんなくてもいいのよ、耳を通過するだけでいいんだから」と言われました。それが本当に励みになりました。私の場合、その頃はまだ耳を通過もせず、Uターンでしたけれども。私はなんでも安易に考えて、講師の方の「聞いているだけでいいんですよ」「ここにいるだけでいいんですよ」という、安易な方だけを受け取るんです。でも、それが続けられる元だったと思いますので、そう言ってくださってとてもありがたかったです。「私が来てもいいんだわ」と思いました。講師の先生や東真同の方、スタッフの方たちもとても言葉が優しいんです。だから自分も心掛けなければいけないと思っていますが、できているかは分かりません。皆さんすごく言葉が優しいから、また来ようっていう気分にさせてくださる。

お寺さんのようなところに来られる方は、構えて来ますでしょう。ですから、やはりそういうお声掛けがとてもありがたいことだと思っています。それを私も努めようと思っています。時々、「野田さんの笑顔に救われる」とおっしゃってくださる方もいるんです。自分が受けたことが少しでもお返しできているのかなと思って、とてもうれしく思います。

日々の生活の中で

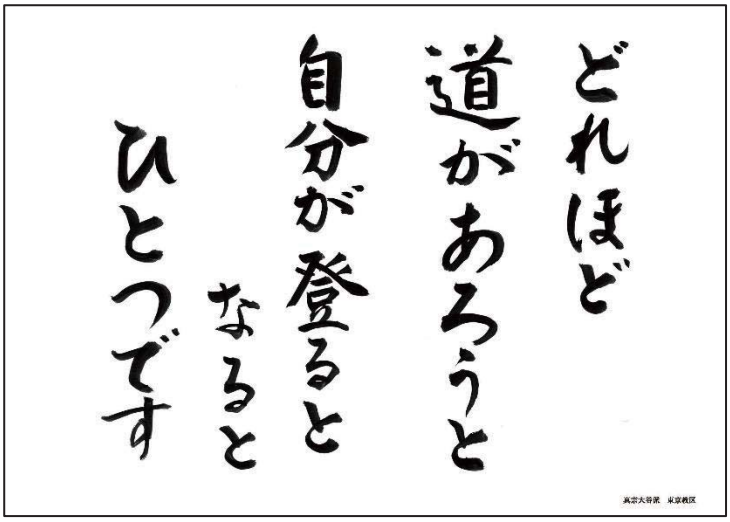
―さきほど、「お内仏に手を合わせることはもともと自分の身に違和感のないことです」とおっしゃっていましたが、そういう環境にあったということでしょうか―

野田　そうなんです。我が家では、夕飯の時などに、仏様のお話やご先祖さまのお話をするのが日常なんです。母はあと少しで90歳というところで亡くなりましたが、よく、「こんなにおばあさんになって、（先に亡くなった）お父さん私のこと分かるかしら」って言っていました（笑）。よく、「忌み嫌う」とか「穢れ」などと言って、そういうことを話題にしないということも聞きます。我が家ではそういうことは全くオープンでした。ですから、親族の子どもたちには、小さい頃からお葬儀にもちゃんと参加させていました。そうすると、遺体に対面した時にも「おじいちゃん、おばあちゃん」って言って顔を撫でるんです。そういうことは、決して特別なことではなく、日常生活の延長線上にあることだと思っています。逆に、すっぱり切ってしまうというところもありますでしょう。そういうのが私はより一層悲しく思います。身内を亡くしたことよりももっと悲しいことですね。もうずっと繋がっています。体の一部というか、「共に生きている」と感じています。

そういうふうだから、私、駅から家に帰るまでの道を、自分で勝手に「念仏街道」と呼んでいるんです。そういうのを名付けるのが好きなんです。池袋の駅から我が家まで7、8分ですけれども。以前に、親鸞様が比叡山から六角堂へお参りされた時に通った「雲母坂（きらざか）」もどういう所かと確認しに行きました。あの道を毎日往復したなんて大変驚きました。私は20代の頃、池坊でお花を習っていましたので、2、3カ月に1回はあちらに通っていたんです。そこが偶然、六角堂だったんです。その当時はもうお花を生けるのに精いっぱいで、全然気が付きませんでしたけれど。

ですから、私もそういう道をつくろうと思って、池袋の駅から家までを念仏街道と呼んでいました。そこを通る間に、「正信偈」をブツブツ独りで唱えるんです。何も見ずに唱えているので間違っているかもしれませんけれども。心の中だけで唱えているつもりでも、時々声が出ることはありますので、擦れ違った人に、ちょっとおかしい人かと思われているかもしれません（笑）。あらゆる所に念仏街道というものをつくってあるんです。もう習慣ですね。いいですよ、念仏街道。

東真同の会の一つ「哲学堂地区会」
（池袋・顯真寺）



故・平野 修 師の言葉
（東京教区発行「掲示伝道用ポスター」より）

大事にしている言葉

―これまでに出遇われた言葉の中で印象に残っている言葉や大事にしたいと思っている言葉がありましたら教えてください―

野田　そうですね。平野修先生の「どれほど道があろうと自分が登るとなるとひとつです」という言葉がポストカードになっているんですが、それがすごく気に入ってしまって、ずっと玄関に飾ってあるんです。出かける時にその言葉を読んで、帰ってきて「ただいま」とそこで言って、そしてまたお内仏に「ただいま」と言っています。今の私の仏様に対する気持ちなど、すべてを表していると思うんです。私も人間ですから自分がいい思いをしたいという欲があります。いろいろ迷わせるのは欲なのだと思っています。そこでそういうお言葉をいただくと、「あぁやっぱりそうよね」と納得させられます。たくさん道はあっても、納得して1本にするという心境です。

それで、「この道を邁進してるわたしは凄い」って、自分を褒め讃えるんです。私は今ひとり暮らしで誰も褒めてくれませんので、自分で自分を褒めるんです。生活の基本にお内仏があるということは、とてもいいですよね。

真宗会館にきて、本当に感謝しています。これ以上の感謝はないです。多少なりとも先生のお話を聞いたり、本を読んだりして、自分が納得して、それを喜びに変えられる気持ちになったという事が、人生最高の幸せです。

真宗会館に来ている方はみなさん明るい方が多いですね。お寺さんというとしんみりしているイメージがあるかもしれませんが、そういう感じはないです。それがとてもいいですね。厳粛な場面ではしんみりしてしまうかと思いますけれども、普段は明るくありたいと思います。一般的にお家の中では、宗教的なことはあまり話題にならないのではないかと思います。お寺さんでもなければ、日常的にお寺や仏様を身近に感じるということはないと思うんです。でも、常に身近に感じられる環境にあるということは人生最高の幸せです。

昔、我が家では、父は早めに寝ましたので、寝る前に必ず母に「お母さん今日も1日ありがとう」と365日必ず言っていました。また母も、何をしても「ありがとう、ありがとう」と言っていて、亡くなる時、意識がなくなる5日くらい前まで1行日記を書いていたんですが、そこに「ありがとう、ありがとう」と書いてありました。親が先に亡くなるのは仕方のないことかもしれませんけれども、記憶の中にそういうものを残してもらったということ、それがより一層お寺さんに傾いていった背景でもあります。皆さん、「今日も1日ありがとう」って、ご家族に言ってらっしゃいますか？

私は全てに感謝です。ですから、報恩感謝ってありますが、本当にそうですね。すべての言葉に納得します。全てが頷きですね。ですから私は、父と母がお互いに感謝し合うというとてもいい環境で育ったと思うんです。お寺さんはそばにはなかったですけれども、家族の間では、とてもいい環境で育ったと思います。

―最後にひとことお願いします―

野田　最近、リモートが多いので、真宗会館にいらしているご門徒の皆さんと直接お会いすることができずとても残念です。いつかまた、ここでマスクもしないで、みんなで大きな声で「正信偈」をあげられる日が、1日も早く戻って来てくれることを願っています。切に切に願っています。病気のことですので、私たちの力ではどうにもすることができませんけれども、こういう時であっても、手を合わせるところがあるということが、とても幸せです。手を合わせることができる場所があるだけでも、救いです。このようなことが起きている事態であっても、希望が持てています。今は、どこへ行ってもロープが張られて、「ここの列は座らないでください」と言われます。そのようなことのなく、肩を叩き合って「元気？」と言って、皆さまと1日も早くお会いできるようになればいいなと、それだけを願っています。

自分のことを思えば、東真同に出遇えたこと、そして皆さまに優しいお言葉をかけていただいたこと、それが最大の幸せです。でも、最後に自分を褒めるんです。「また来てね」と言われたら、「ちゃんと来ましたよ」「えらいでしょ」と。そういう気持ちにさせていただけたってことが1番ですね。皆さんがとても優しくて、自分もそうなりたいなと思います。

―ありがとうございました―

コロナ禍以前の
東真同報恩講の様子

取材後記

昨年の12月某日、真宗会館別館の東真同室において、野田会長にインタビュー―をさせていただきました。

「余所の家の親は亡くなるかもしれないけれど、自分の親が亡くなってしまうなんてことは想像もつきませんでした」という野田会長のこの言葉には、思わず心に突き刺さるものがありました。これは、私たちが誰しも思っている（思っていた）ことなのではないでしょうか。

また、「聞いているだけでいい」「ここにいるだけでいい」という言葉を励みに、聞法の場に身を置き続けることを大切にされてきた野田会長のご様子がとても印象的でした。拠りどころをもとめ、丁寧に教えを頂戴し念仏申していく姿勢は、私たちが足跡を辿るべき念仏者の先達としての姿であると感じました。

野田会長にはお忙しい中、快く取材に応じて頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

（田上 翼）

東京真宗同朋の会
年間行事・聞法会のご案内

東京真宗同朋の会では東京都を中心として関東各地で定例の聞法会をひらいています。その為、お住まいや交通の便・時間、講師、テーマなど、出席しやすい会場を選んでいただき語り合うことができます。それぞれの聞法会では、講師の先生と近い環境で気軽に語りあうことができるのが特徴です。

経典や『歎異抄』を始めとする仏教書などを通して、共に集った方々と語らう中で普段とは違った考え方に出遇えるかもしれません。

また、２０２０年より新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、インターネット会議ツール「Zoom」を利用した聞法会も開催しております。

詳細につきましては東本願寺「真宗会館」までお問い合せください。

年間行事

１月	真宗会館修正会 真宗会館仏具お磨き奉仕 東京教区報恩講
４月	花まつり法要
７月	真宗会館仏具お磨き奉仕 盂蘭盆会兼物故者追弔会及び総会
１０月	真宗会館仏具お磨き奉仕 東京真宗同朋の会報恩講厳修
１１月	真宗本廟奉仕またはご旧跡参拝

光明の会
●東本願寺「真宗会館」
（練馬区谷原 1-3-7）
清沢満之著『精神主義』、東本願寺出版『現代の聖典』輪読と座談会　講師は柳浦静男氏、雲井一久氏（不定期）

城北地区会
●坂戸駅前集会施設
（坂戸市日の出町 16-11）
東本願寺出版『テキスト歎異抄』を輪読。輪読と法話、座談会。講師は嵩海史氏。

市川船橋地区会
●名響寺（市川市伊勢宿 18-7）
池田勇諦著『浄土真宗入門』を輪読。お勤め、輪読、法話。講師は井上真人氏。

城南地区会
●青少年交流・活動支援スペース
（横浜市中区桜木町１丁目１
桜木町ぴおシティ 6F）
東本願寺出版『僧侶 31 人のぽけっと法話集』を輪読。輪読後、座談会。講師は藤井晃世氏。Zoom にて開催中。

【お問い合わせ】
東本願寺「真宗会館」（担当：中臣）
TEL：03-5393-0810
Mail：info@shinshu-kaikan.jp

右記 QR コードより
真宗会館 HP でも
ご確認いただけます。

https://shinshu-kaikan.jp/

聞法会

教行信証大綱輪読会
●親鸞仏教センター（文京区湯 2-19-11）
曽我量深著『教行信証大綱』を輪読。お勤め、輪読、法話。講師は齊藤研氏。Zoom でも開催。

サムドラの会
●東京大学仏教青年会
（文京区本 3-33-5 本郷ビル 2F）
法話の会。お勤めと法話。講師は海法龍氏。Zoom にて開催中。

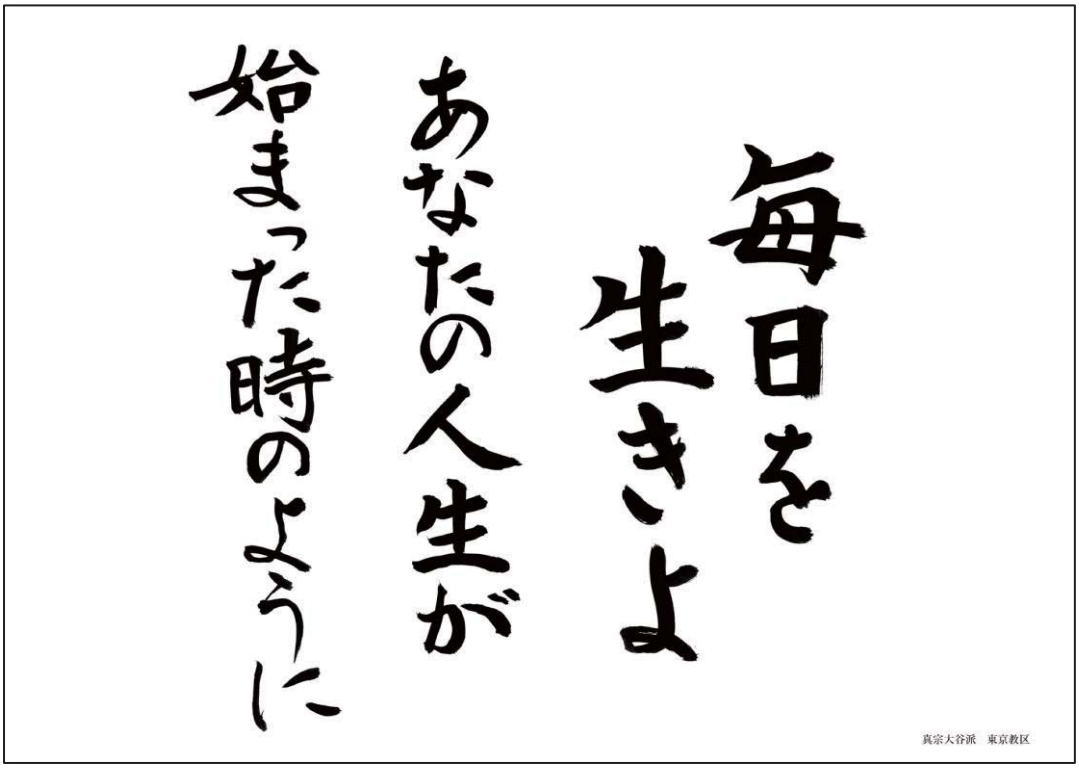
まくはり会
●了善寺（東京都港区 1-13-22）
宮戸道雄著『仏に遇うということ』を輪読。お勤め、輪読、法話。講師は百々海真氏。Zoom にて開催中。

あきば会
●名響寺（市川市伊勢宿 18-7）
坂東性純著『新講歎異抄』を輪読。輪読と法話、座談会。講師は岩松知也氏。

哲学堂地区会
●顯真寺（豊島区南池袋 4-20-1）
現在は『歎異抄』についての法話。お勤め、法話、座談会。講師は近田聖二氏。

暁の会
●東本願寺「真宗会館」
（練馬区谷原 1-3-7）
櫟暁著「行信の伝承と己証」を輪読。輪読と座談会。

今月の法語



書：佐藤 多仙

・頒布中「掲示伝道用ポスター」（A2 サイズ）
　　「掲示伝道ポスターミニ」（ポストカードサイズ）
・「掲示伝道用ポスター」が貼れる門徒宅用掲示板を無償設置いたします。
詳細は東京教務所まで。

教区教化通信　総合調整総務会

伝道講習会22期修了者の集い

２０２１年度に開催された第22回伝道講習会本講から約半年後の12月７日、22期修了者を対象として、「伝道講習会22期修了者の集い」が開催されました。

当日は、修了者３名から、「伝道講習会」での学びがどのように深まり、課題となっているのかを踏まえ、ショート法話をいただき、その後、本多雅人道場長（東京２組蓮光寺）、松井憲一先生（元大谷大学非常勤講師）より講義、そして座談を行い、その後の会食の場では、今後も継続した学びの場を自主的に開いていくことについて語らいました。

参加者からの一言

茨城１組　妙安寺　中村　晃

今回の「東京教区伝道講習会22期修了者の集い」（以下「集い」）では、修了者に10分程度の法話を話す時間が設けられていた。当日に話す内容を事前に考えていたのだが、おかげで伝道講習会が終了してからの半年間を振り返ることができた。半年前の法話実習で問題としていた自分への問いかけを、日々の生活の中で忘れていることに気付いた。きっと今回の集いがなければ、自らを振り返ることもなくこの問いを忘れ去っていたに違いない。

また、第22回伝道講習会は新型コロナウイルス感染防止策を講じながらの開講で、松井先生との語り合いの場が例年よりも少なかった。このことを本多道場長が配慮してくださり、今回の集いに京都から松井先生を招き、講義をしていただけた。

語り合いの場が少なかったのは松井先生や道場長だけでなく、スタッフ、そして同期の人達に対してもいえる。思うように同期と語り合うということがなかなかできない伝道講習会であったと感じていた。そのため、今回の集い終了後にみなで会食をして、みなと語り合う場が設けられたことを嬉しく思った。22期の同期とは、これからも共に学んでいく仲であるということを再確認できた。

このような貴重な時間と場を開くためにご尽力いただいた方々に感謝をいたします。

←松井憲一先生

→道場長講義

◆今後の予定◆

伝道講習会修了者研修

期日　２０２２年５月24日～26日

場所　宮田屋旅館（群馬県）

※詳細は改めてご案内いたします。

教区教化通信　同朋の会推進部門

真宗門徒秋のつどい ー推進員のつどいー

テーマ：「南無阿弥陀仏　人と生まれたことの意味をたずねていこう」

講　師：池田 徹 氏（三重教区 桑名組 西恩寺）

同朋の会推進部門委員
茨城1組 西念寺　光林 智暁

10月18日、池田徹先生に遠路ご出講いただき、「真宗門徒秋のつどい」が、真宗会館とオンラインでのハイブリッドで開催されました。新型コロナウイルス感染症の影響により、昨年の秋のつどいから、ハイブリッドでの実施が続いています。参加者が一堂に会していないことへの戸惑いや難しさをスタッフとして感じていますが、今回はオンラインでの参加者の発言も、会場の参加者と直接共有できるようになり、より一体感を持っていただけたように思います。

池田徹先生は、はじめに「南無阿弥陀仏　人と生まれたことの意味をたずねていこう」と言われても「はい、たずねていきます」となりますか、と投げかけられました。なぜ「教え」からの問いかけや呼びかけをいただいても問いにはならないのか、また教えが届く位置とはどこなのかということを、『仏説観無量寿経』の韋提希夫人（いだいけぶにん）に尋ねていく形でお話しいただきました。教えの言葉を自分の物差しで単なる情報として聞いていて、「自分全体が問われる出来事として教えを聞けていない私」が問われる貴重な学びとなりました。

夏以降の緊急事態宣言が9月末で解除されたため、今回の秋のつどいを開催することができました。今後もしばらくの間はコロナ以前のように宿泊を伴ってじっくりと教えにふれ、互いに膝を突き合わせて話し合う形での実施は難しいかもしれません。それでも、今可能なことを見極めながら、聞法できる機会、参加された方同士が出遇える機会を大切にして、共に学んでいけたらと思っております。

〈今後の予定〉

【真宗入門講座（推進員前期教習）】

期　日　①3月1日（火）
②3月2日（水）
③3月14日（月）
※全3日とも13時～17時15分

場　所　東本願寺真宗会館

講　師　武田 定光 氏
（東京6組 因速寺）

参加費　3000円（3日分、当日申受）

【推進員後期教習】

期　日　6月1日（水）～3日（金）

場　所　同朋会館（京都 東本願寺）

講　師　牧野 豊丸 氏
（福井教区 第2組 託願寺）

※詳細については
東京教務所（担当：立野）まで

教区教化通信　青少幼年部門

第2回青年学習会　フィールドワーク

去る12月2日、第2回青年学習会が開催されました。今回はフィールドワークとして六本木のサントリー美術館で催されていた、千四百年御聖忌記念特別展「聖徳太子　日出づる処の天子」を鑑賞しました。その後、東京5組の圓林寺様へ移動して、仏教または真宗と聖徳太子の関わりなどについて、座談を行いました。

参加者感想

東京5組　心海寺　本多　敬有

令和3年12月2日に、六本木にあるサントリー美術館で開催されていた、千四百年御聖忌記念特別展「聖徳太子　日出づる処の天子」を鑑賞してきました。聖徳太子といえば学生時代、歴史の授業で習ったように、「十七条憲法」や「冠位十二階」を制定し、十人の話を聞き分けた逸話があったり、過去に何度か紙幣の肖像に採用されるなど、日本の歴史で重要な人物の一人であります。また、聖徳太子は日本において仏教興隆に尽くした人物でもあり、仏教と深い関係があります。

浄土真宗の寺院では、本堂の余間に聖徳太子の絵像がかけられています。それは、「十七条憲法」の第二条に「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。」、「其れ三宝に帰りまつらずは、何をもってか枉れるを直さん。」といった言葉を記したことなどから、親鸞聖人は和讃の中で聖徳太子を「和国の教主」と讃えており、聖人が聖徳太子を尊崇していたことがわかります。そして、聖徳太子は日本仏教に多大なる影響を与えたと考えられており、日本各地の寺院や博物館に太子に関連する肖像やゆかりの品々が存在しています。今回、普段は見る機会が少ない他宗派の聖徳太子像などを拝見することができ、大変貴重な経験をさせて頂きました。

圓林寺での座談の様子

教区教化通信　「同和」協議会

２０２１年度

第２回部落問題基礎講座を受講して

千葉組 淨眞寺 門徒　平林 勝司

主題の講座が、12月10日（金）真宗会館にて真宗大谷派同和関係寺院協議会元会長の片山寛隆氏（三重教区相願寺住職）を講師にお迎えし開催されました。

片山先生は、同和関係寺院の住職として被差別部落ご門徒と共に今日まで歩んで来られました。そのご体験は、部落問題について今まで実体験のなかった私にとりまして、実に、身震いするほどの衝撃的なお話でありました。被差別部落民との結婚等冠婚葬祭の時の親子・親戚の葛藤が生々しく語られ、今更ながら複雑怪奇な「差別」の奥深さを思い知らされました。

差別する心は、悲しいかな誰もが持ち合わせています。理屈で差別は良くないと解っていても、感情が先にどんどんと独り歩きしてしまいます。気が付けば差別心で心が覆いつくされています。

しかし感情がどうあれ、差別はなくす方向で進まなければなりません。それが現代を生きる我々の努めだと思います。一人一人が心の中で差別心と闘わなければなりません。

来年、２０２２年は水平社創立１００周年と聞いております。これまで宗門に問われ続けた問題が、今なお残っているようです。現在まで残っているということは、なかなかの難問なのでしょう。しかし何時までもそのままにしておいて良いはずがありません。この機会に蛮勇をふるって諸問題を解決する、その気概が必要だと思います。

万が一、その解答が後の世に間違っていたと批判されれば、その時点で再考すれば良いのです。私たちは、神・仏ではありません。生身の人間です。間違いはあります。しかし間違いを恐れてそのまま残しておくのは最悪です。問題は素早く取り組み解答を出していく。常に身軽な宗門でありたいと念願しております。

▲講師の片山寛隆氏

教区教化通信　教学館

私が出遇った言葉

「同朋社会の顕現」について

東京1組　正見寺　伊與田　兼信

このたび、令和3年12月8日をもって、第八期教学館を満了いたしました。西田眞因先生には、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

一年以上、コロナウイルス蔓延防止の観点からオンラインでの講義となっていましたが、最終講義は、真宗本廟にて先生と直接お会いすることができ感無量でした。先生から燃え上がるような真宗に対しての情熱を感じ、自身を冷徹に観察された言葉を聞き、お会いできてよかった、また、教学館に参加して良かったと改めて感じました。先生が目の手術をされた話など生活の話は実存的で、それを受けての思索は凡夫としての生き様の言葉でありました。

講義は、『宗憲』の前文にある「同朋社会の顕現」を受けて、「同朋社会」を真宗門徒として、どう捉えるかという問題提起でした。講義の中で江戸時代の越中門徒、吉田源之助さんの家訓が紹介されていました。家訓には日常の中で常に阿弥陀を念じ、感謝しながら生きていくという真宗門徒の生活態度が書かれていて、例えば、夫婦喧嘩をした時であっても、その腹立ちの心によって「永ク大悲ノ御胸（むね）ヲ焦シ又モ大悲ノ御胸ノイタマシモノヲ」と自らを批判的に自覚し、反省するというものです。感謝と懺悔、服従と批判の生活です。この家訓を、対人関係の倫理として発生されたものではなく、阿弥陀との関係性によって育まれた心が縁に触れ出てくる真宗門徒の日常生活が形成されていった重要な文献として位置付けておられました。

しかし西田先生は、そういった理想的な真宗門徒の姿勢が、ひとたび視点を変えた時、非常に危うさを持っていると指摘されました。体制思想の中では、そのような自己批判、自己否定の信仰態度は、支配者にとって都合がいいものであり、弱者が喜んで服従する論理になり得ることに気付いた西田先生は非常に驚愕したと述懐されていました。その意味で見方を変えれば「真宗門徒という人間を大量に生み出した真宗ほど優秀な支配思想はない」ともおっしゃっておられました。

阿弥陀との関係性が育む日常生活、この一点こそ真宗たるゆえんだと思います。そこに注目して、現代における具体的な真宗門徒像の再構築の必要性を感じました。また、自由で多様な現代社会を、同朋社会として見抜く力と言葉がもっと欲しいと感じました。

第29回　教学館月例学習会（最終回）

会　　場：同朋会館／ＺｏｏＭ

基調講義：同朋社会の原像 - 信心とそのエートスＥｔｈｏｓを中心として -

西田　眞因　氏（元教学研究所所長）

特別講義：なし

「お釈迦様の行事　涅槃会」

銀の鈴幼稚園では「人の生涯」を知るために、お釈迦様の「お誕生」「お悟り」「涅槃」を機に行事を行います。お釈迦様の生涯を描いた紙芝居をデジタル画像にして、オリジナルの「お釈迦様の歌」を歌いながら、お釈迦様に親しみを持つとともに、「人の生涯」ということを知り、伝えていく行事です。

２月にはお釈迦様のお亡くなりになった「涅槃（ねはん）」を縁として、お釈迦様への謝念を伝えるために、「涅槃会（ねはんえ）」が開催されます。

ご本尊の奥には、お釈迦様のお亡くなりになられた姿を描いた涅槃図を吊ります。そこにはクシナーラの森の木々や緑の中に囲まれて、お釈迦様の死を悼む人々、子どもの姿や、絵本に描かれた「３匹の子豚」をはじめとしたたくさんの動物たちや鳥たち、「泣いた赤鬼」の鬼達までも描かれているのが特長です。一切衆生を表した絵図なのですね。

お釈迦様の穏やかな涅槃の姿のまわりに広がる生き物達の絵を見ていると、いのちはつながりあっているのだなあということを思わされます。子ども達もじっとこの絵図を見つめながら、何かを静かに感じてとっているのではないでしょうか。

生まれたものは必ず亡くなっていくという事実とともに、お釈迦様はいなくなっても、お釈迦様が教えてくれた、たくさんの大切な言葉は残っていくということもお話しています。

言葉は目に見えないけれど、「心に残っていく」という事、心に残る言葉となった教えを、自らの拠り所にしていくという事、そういういのちの「宗（むね）」を感じ取ってほしいという願いがこの涅槃会の行事に込められているのだと考えています。

もちろん「死ぬ」ということを怖がる子ども達もいますが、心に残るものの大切さや温かさ（灯）が、「ありがとう」の気持ちにつながって、自分の希望や力に変わっていく事を願います。

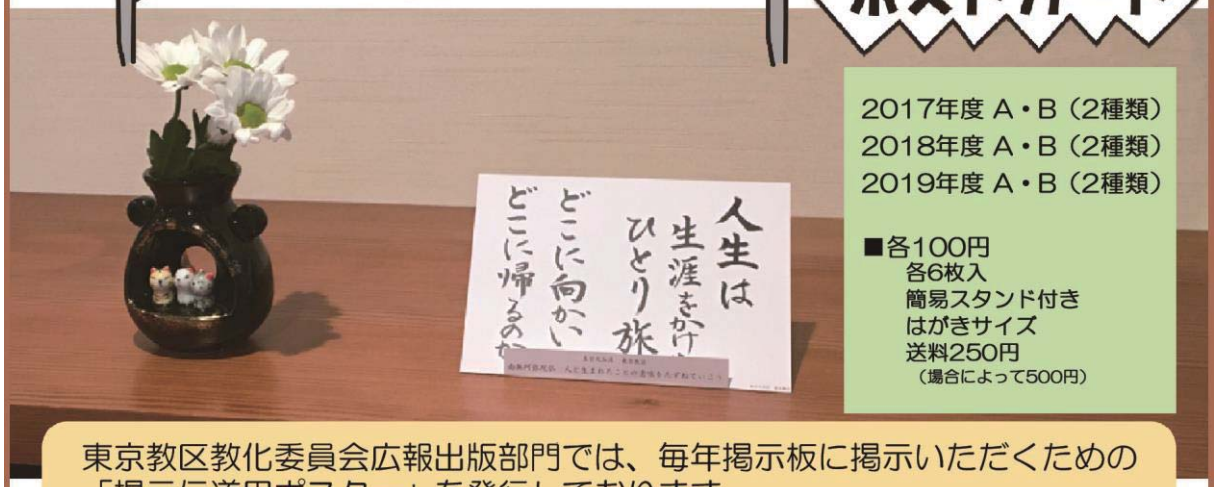
学校法人慈光学園
銀の鈴幼稚園
（東京都世田谷区）

園長　五島　満

NEW

「掲示伝道ポスター」

ミニ ポストカード



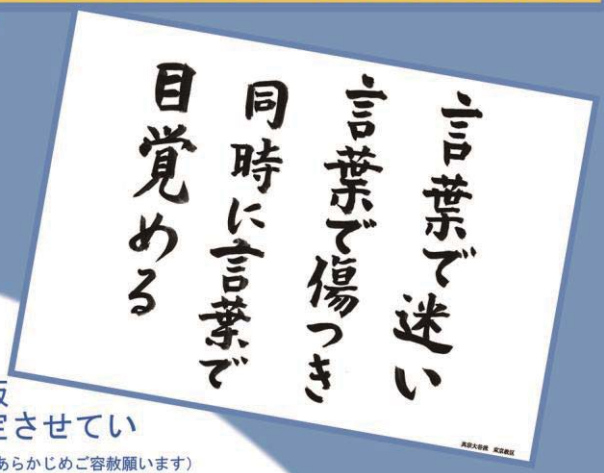
2017年度 A・B（2種類）
2018年度 A・B（2種類）
2019年度 A・B（2種類）

■各100円
各6枚入
簡易スタンド付き
はがきサイズ
送料250円
（場合によって500円）

東京教区教化委員会広報出版部門では、毎年掲示板に掲示いただくための「掲示伝道用ポスター」を発行しております。
このたび、生活の中でより身近に言葉に触れていただけるように、**ポストカードサイズ**の「掲示伝道用**ポスターミニ**」を発行いたしました！
ご寺院での行事の際に、ご門徒への記念としていかがでしょうか？
お申込み：東京教務所（TEL03-5393-0810/担当:海）まで

「掲示伝道ポスター」言葉を大募集

このたび、東京教区の「掲示伝道ポスター」作成にあたり、広く掲示用の言葉を募集いたします。
つきましては、教区の皆様に対し、普段の生活を通して心に残る言葉がございましたら、是非、ご紹介賜りたく募集いたします。



募集要項

概要：応募いただいた言葉の中から東京教区教化委員会・広報出版部門で法語ポスターとして選定させていただきます。（選定されない場合があることをあらかじめご容赦願います）

募集：所定の用紙でFAX、郵送にてご応募ください

締切：２０２２年２月１１日（金）

※ご不明な点は東京教務所　TEL03-5393-0810
（担当：佐々木・大橋）まで

はい！こちら真宗会館です

駐在日記

駐在からひとこと
写真：［第８期教学館］西田先生による
聖跡案内（京都）

東京教区駐在教導
佐々木　弘明

「受け継がれること」

昨年１２月で第８期教学館が終了した。毎月１回、３年を１サイクルとし、東京教区で２０年以上継続している若手僧侶の学びの場である。第８期は、新型コロナウイルスの影響で、全体の半分近くがオンライン（Zoom）での開催となった。

最終回だけは何とか対面で開催したいと、主幹・研究員と相談し、新型コロナウイルスの感染拡大も落ち着きをみせていたので、初日は同朋会館（京都）を会場に、対面とオンラインを併用して西田眞因先生から講義をいただき、２日目は西田先生の案内で、京都市内の親鸞聖人有縁の地のフィールドワークを行った。

西田先生には、第６期から第８期に亘り基調講義をいただいた。私が教学館を担当するようになったのは、第６期の途中からと記憶しているが、一人の先生の講義を毎月１回、約７年間聞き続けてきたということになる。これまでの人生で約７年もの間、毎月一人の先生の講義を聞き続けたという記憶はない。

西田先生の講義は、時には内容が難解すぎてついていくことができないこともあったが、西田先生がお話する姿、そして言葉から、私の中に「真宗」が沁（し）みこんで、動き続けていると感じている。『NW9』に掲載されている教学館のコーナー「私が出遇った言葉」でも多くの研修員の方が紹介していたが、西田先生が仰った「自分の真宗で死んでいけるのか」という言葉が私の中に突き刺さっている。

教学館では、西田先生自身の「真宗」を聞かせていただいた。その「真宗」を受け取り、西田先生の「真宗」ではない、私自身の「真宗」を生きていく覚悟を持たなければならない。

第９期教学館は、２０２２年７月以降に研修員の募集を予定している。

はい！こちら真宗会館です

宗務出張所
次長
里雄 亮意

つぶやき 所員の

担当：宗務出張所事務の整理
最近読んだ本：『サンガ』３月号の取材を終え、堀潤さんの『私は分断をゆるさない』を再読中

単身赴任になってもうすぐ４年になる。今度の日曜日は帰ってきてねと妻からの連絡。市が主催する人権啓発推進大会で次男（小学６年生）が書いた標語が奨励賞に入選し、表彰式が行われるそうだ。しかし、本人は何を書いたか全く覚えがないらしい。

半信半疑のまま市民会館へ行くと、それは確かに掲示されていた。子どもの成長を懐かしみつつも、転勤続きで妻には苦労をかけっぱなしだなあと申し訳ない気持ちになった。

表彰式に続いての記念講演はドキュメンタリー映画監督の纐纈（はなぶさ）あやさん。「祝（ほうり）の島」「ある精肉店のはなし」を制作され、宗派でも度々上映会や講演会でお世話になっている。

「祝の島」の舞台となっている祝島は瀬戸内海に浮かぶ山口県の小さな島。人間の営みが山と海との自然の循環の一部であると感じる。その島のすぐそばに上関原発の建設が計画されている。

テレビ等の報道には原発建設に猛然と反対する島の人々の姿が映し出されるが、実際にそこに暮らす人たちの日々の生活はとても素朴で温かく、懐かしい。そんな島の人たちが毎朝手を合わせる朝日の昇る方角に原発が建設されようとしているのだ。理屈だけでは割り切れない。さらに、長く続く建設計画の中で、島の人たちは推進×反対で分断されてしまっている。

纐纈さんは、差別と向き合う中で最も大切なのは、自分につながっていると感じることだと話された。折しも「分断」をテーマに取り組まれているジャーナリストの堀潤さんに『サンガ』でお話しをいただく。「沈黙」に胡座をかいている私が問われているのだ。

ちなみに、次男が書いた標語は「怖いのは　病気などより　冷たい目」。

妻と子に頭を下げるしかない。

教区の情報をあなたに　あなたの声を教区に!!

一緒にネットワーク９を作りませんか？

編集員募集中!!

Network 9

東京教区教化委員会報　ネットワークナイン

取材、原稿執筆、校正、デザインなど、紙面作りに関するすべてを行います。お寺の新聞やチラシを作る時のスキルも学べるかもしれません。パソコン初心者の方でも大歓迎です。先輩編集員が丁寧にご指導します。一緒に楽しいネットワーク９を作っていきましょう。
興味がある方、お問合せは東京教務所（担当：佐々木）まで

ネットワーク９へのご意見・ご感想をお寄せください
〒177-0032　東京都練馬区谷原1-3-7　東本願寺真宗会館内 東京教務所
【電話】(03)5393-0810【ファックス】(03)5393-0814
【mail】nw9@ji-n.net

スマホやパソコンでぜひアクセスを！ 東京教区のホームページ

暮らしに じぃーん

お寺をもっと身近に

多彩なコンテンツ

- じぃーん散歩 New
- しんらんさまめぐり
- 法話／行事・講座
- なるほど仏事作法
- 寺院検索

他

うちのお寺も載ってる！

www.ji-n.net

検索　暮らしにじぃーん

スタッフ募集

パソコン技術は不要です

ホームページ班のメンバーは僧侶に限らず、月に約１回のペースで集い、アイデアを出し合ったり、時には現地取材もしています。ぜひご一緒に活動しませんか？（お問合せは教務所／立野まで）

敬弔

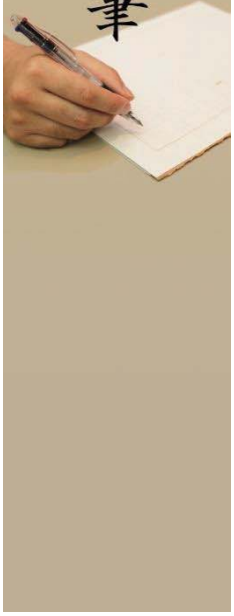
佐々木 健夫 様
横浜組 願西寺 前住職
12月16日命終 71歳

大谷 康雄 様
埼玉組 遊了寺 前住職
12月23日命終 89歳

生前のご功労を偲び、
念仏合掌して哀悼の意を表します。

12月末日届出迄

涌（ゆう） 編集員の随筆



この文章を書いている時点（21年11月下旬）では以前より日本のコロナの新規感染者はオリンピックの頃に比べ明らかに減っており、地元（三浦半島）から町へ出ると人通りが多いなと感じることが多くなりました。

私は自坊の法務と並行して音楽関係の仕事（主にクラシックの演奏会を開催したり合唱団のボイストレーナー）をしていますが、コロナ禍になってからほぼ音楽の仕事は無くなり、やっと本格的にホールで歌えたのはパンデミック発生からおよそ1年経ってからでした。それでも、座席数は会場の半数以下に制限し、歌うときはマスクを着用したり、場合によってはパーテーションで仕切りを作ったりと、今現在でも音楽会を開催することは困難な状況が続いています。

最近ではあまり聞かなくなりましたが、『自粛警察』が巡回（横行？）していた頃、芸術文化に対する世間の風当たりは凄まじいものがあったのを覚えています。好きな事しているのに図々しい、そんな事に補助金を使うな、等の言葉を耳にしました。

芸術は自己満足の世界かもしれません。歌ったところでコロナが収束するわけでも、日本経済のプラスになるわけでも、世界に平和が訪れるわけでもありません。歌い手が、「皆さんの幸せを願って」と言っても、「それはあなたのお考えですよね？」と言われると、ぐうの音も出ません。

ただ、自分がこういった事を考えられるようになったのはコロナ禍になったから、というのも事実だと思います。今まで好き勝手に歌ってこられたのは、多くの方々に支えられていたからだった、お前はそれを忘れていたのではないか、と突きつけられていると思うのです。

約7年前、修練で最後の座談の時に、班担の先生に、「問いを持てて良かったね」と言われたのをふと思い出した次第です。

（三浦組 來福寺 和田 祐樹）